



地人館
E-books

デモ版 pdf

山河を越えて 心のガイドブック

観音霊場巡拝記 1

秩父三十四札所

酒本幸祐 著



酒本幸祐さんの巡拝記——刊行にあたって 地人館代表 大角修

酒本幸祐さんは六月書房という出版社の社長をしながら、故郷の四国八十八ヶ所をはじめ、あちこちの寺社詣でを欠かさない。2004年4月には、西国・坂東・秩父に加えて鎌倉三十三観音巡拝の記録『菩薩の風景 日本百観音霊場巡拝記』を上梓された。本書はそのなかの秩父巡拝の部分を再編集したものである。

ところで近年、靈感スポット、スピリチュアル、御朱印集めといった言葉とともに、寺社参りの人気が高まっているという。観音札所についても、各地の霊場会のサイトをはじめ、各種の旅行ガイドブックなどで盛んに紹介されている。にもかかわらず、もう20年も前に刊行された観音霊場巡拝記を再刊したのは、昔から庶民の楽しみだった「信心の旅」の感覚がよみがえるように思われたからである。

酒本さんは古い友人であるが、とりわけ信心深いようでもなく、何か特定の信仰をされているわけでもない。そんな強い信仰ではなく、素朴に神仏に礼拝するところに味わいがある。

たとえば、「第一番 誦経山四萬部寺」の項では次のように記されている。

「近頃では巡拝する人も、巡礼の正装をしている人が少ないが、買ったばかりの白衣の鮮やかさ、

ずた袋に付けた持鈴のチリーンと澄んだ音、そのうえ輪袈裟に金剛杖と、(中略)やはり、巡礼は正装でなくてはいけない」

また、秩父札所の三十番から三十四番までの五ヶ寺について、このように書かれている。

「この最後の五ヶ寺は、寺間の距離もあり、歩く巡礼にとつては根性がある場となる。観音様のご慈悲をしみじみ感じる行程でもある。車で廻る者にとつては、秋の陽の中、澄んだ空気の中、美しい風景を眺めながらの行程であった。もつたいないことであった」(「秩父への道」より)

この「もつたいないことであった」という感覚を近年流行の寺社参りの人はもつことができるだろうか。観音堂の前で撮ったVサインの写真をメールで送る世代には、もしかしたら、消えてしまった感覚かも知れない。といって、霊的なものへの関心は消えない。寺社参りから「もつたいない」「ありがたい」という素朴な感覚が失われたとき、その心の空白に靈感とか怨霊とかの恐怖がしのびよってきてても不思議ではない。

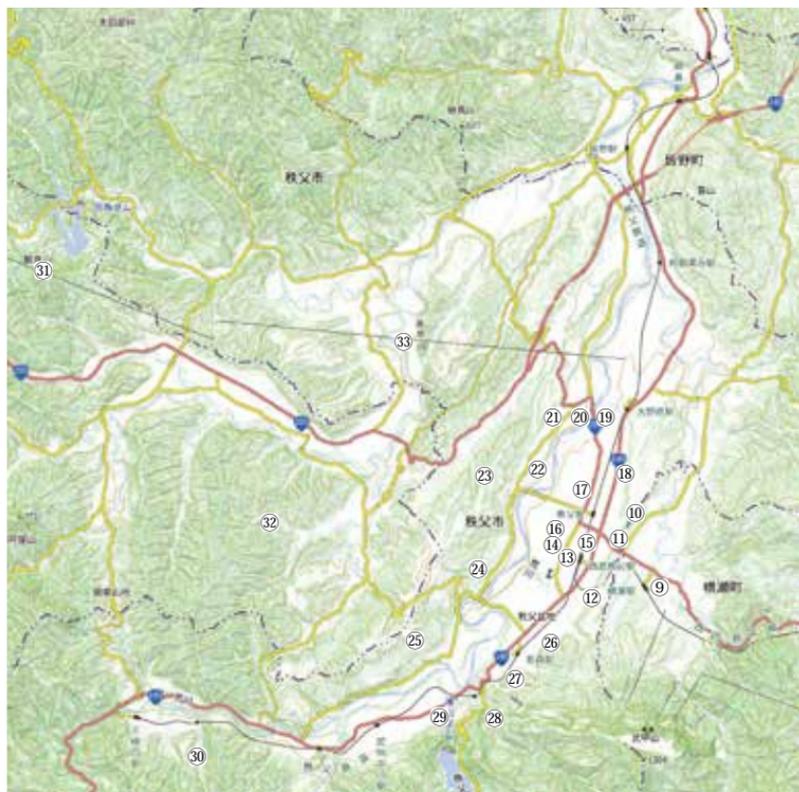
この不安の時代に酒本幸祐さんの巡礼記は、ほどよく信心深くて貴重なものである。



第二十番・法王山岩之上堂 岩之上堂は、荒川河岸の岩の上にあることから名がつけられた。寺の上方に道が造られるまでは、舟で荒川を渡り、登って参拝していたそうだ。



第二十四番・光智山法泉寺 寺伝では、観音信仰に篤い遊女が口中の病で苦しんでいる時、秩父から来た僧が「白山観音を念じて用うべし」といい、一本の楊子を置いて行った。遊女がその通りにすると、病いはまたたくまに治った。それ以来、法泉寺は病氣快癒の祈願での参拝が多いという。



秩父三十四所（数字は札所の番号）

*地図は、国土地理院の電子国土 Web データをもとに作成しました。



秩父三十四観音朱印帖

秩父札所の始まり

観音霊場は全国各地に数多くあるが、たいてい三十三観音霊場である。三十三観音といわれる由縁は、『妙法蓮華経観世音菩薩普門品』の中に、観音様が三十三通りに身を変えて、われわれを救って下さると書かれているところからきている。人それぞれの境遇に合わせて、その人が一番よく理解できる姿で現れ、救ってくださるといなのだ。また三十三は、単に数を表わすだけでなく、「広大な」「無限の」という表現でもある。

ところが秩父は三十四観音霊場なのだ。何故という疑問に答えるには、観音霊場の成立と、秩父三十四観音霊場の創設を説明する必要がある。そこでごく手短かに観音霊場の変遷を書くこととする。

文献によれば、観音霊場としては西国さいごく三十三観音霊場が最初であり、その創設は古く、平安時代・寛和二年（九八六）花山かざん法皇が創始者であるといわれている。

その後、鎌倉時代初期、三井寺みいでらの僧覚忠かくちゆうが三十三観音霊場を巡礼した記録が残されている。それで、三井寺の僧侶たちによつて、西国三十三観音霊場は盛んに巡礼されるようになった。これと同時に民衆の中にも観音霊場巡礼は盛んとなり、社会通念として武士や庶民の中では、巡礼に出

ることが生涯における務めと考えていたともいわれている。

西国三十三観音霊場の巡礼が盛んになると、坂東でも観音霊場への憧れが募ってきたが、西国へは地理的に考えても、庶民が巡礼するには遠すぎる。そこで西国に倣って、坂東三十三観音霊場が制定されることになった。西国霊場に倣って制定されたことは、坂東霊場の数ヶ寺の縁起に、西国霊場の創始者といわれている、花山法皇が巡られ、札所に指定したと記すものがある。勿論このことは、札所としての権威付けのためのものであることは間違いない。

時は鎌倉時代の初期であり、政治、権力は鎌倉にあつて、坂東霊場を制定することなどは容易なことであつたはずだ。そのことは一番札所から八番札所までと、十四番が鎌倉から始まり、神奈川県下にあることでも分かる。以降の寺々は、埼玉県、東京都、群馬県、栃木県、茨城県、千葉県へと七都県にわたって東京湾を囲むように展開している。

西国霊場の隆盛なことから、坂東霊場を制定したことは、関東武士団の中に京への憧れもあり、鎌倉幕府の権力を示すものでもあつたのではないだろうか。七都県にまたがる広い霊場分布は、当時の鎌倉幕府の勢力範囲を示すものだったのかもしれない。

西国、坂東と観音信仰が庶民の中にも盛んになると、観音霊場を巡礼したくても、日数もかかり、体力的にも、経済的にも困難な人が多かつたはずで、この人々の観音信仰への思いをかなえるために、狭い地域の中に三十三観音霊場を創設する、地方霊場が盛んに誕生するようになった。その地方霊場の一つが、秩父観音霊場ということになる。

秩父霊場の創設については、資料として確認できるのは長享二年（一四八八）の後期室町時代で、一般に言う戦国時代であるが、実際にはもう少し古いのかも知れない。後でもふれるが、この頃の秩父霊場は、現在の三十四観音霊場ではなく三十三観音霊場であった。

秩父霊場の創設が戦国時代であったことを知って驚いたことは、戦国時代は覇権を争って武士団が戦いに明け暮れていたと想像していたが、この時代に観音霊場を創設して、巡拝をするという庶民の遅^{たぐま}しさである。逆に戦乱の世だからこそ、観音様に来世を託していたのだろうか。いずれにしても、戦国時代といわれる時代にも、平安な時間はあったようだ。武士団も互いに争いながらも、農繁期、休戦期、戦闘期などがあって、現代の戦争とは異なり、どこか信義を重んじるサイクルがあったのだろう。

さてそこで、秩父が三十四観音霊場となった時期であるが、納札によって確認できるのは、同じく戦国時代・天文五年（一五三六）であり、秩父霊場創設より約五十年ほど後のことである。

何故、三十四観音霊場としたのか。当初の秩父霊場の創始者が生きていたら、あるいは創始者の意志を継承する者がいたとしたら、それは素晴らしい知恵者といわなければならない。当時から現代までの五百年後を、これから続く五百年、千年後を見通した、天才的な知恵者であったといえる。

何故なら、西国三十三観音、坂東三十三観音、秩父三十三観音では合せると九十九観音ということになる。三十三という数は、観音経の中で観音菩薩の化身として数えられ、また「無限」と

いう意味を持つことは、先にもふれた通りである。私の個人的な意見としては、九十九観音霊場の方が、より無限という意味を表わしているように思えるのだが、三十三、三十三、三十四とし、百としたところに、秩父観音霊場の創設者の知恵が成就したことになる。百という数字は語呂もよく、達成した、完成したという感が強い。九十九という数字が無限を感じさせるとしても、人間の寿命は有限であり、観音霊場巡拝もどこかで結願けちがんし、思いが観音様に届いた実感がほしい。その意味で、百観音という言葉は結願を表わすのにふさわしいといえる。

このことを考えている時、観音様が集まって百体となった時、新たな力を持つ仏様に変身するのか、百という数字に仏教的な意味があるのではなからうかと思つて、秩父三十三番札所・菊水寺きくすいに電話を入れた。

なぜ菊水寺かという点、秩父霊場巡礼中、菊水寺住職と思われる方が、大変に博識だとお見受けしていたからである。電話でそのことを問うと、「百という言葉は語呂もよく、日本人は好きですからね。仏教的には特に意味はありません」と簡潔に答えて下さった。

かくして、秩父霊場は、三十四観音札所となることで、関東の一地方観音霊場でありながら、名刹、古刹、大寺の多い西国、坂東観音霊場と互して、今日まで隆盛である。この特異さは、他の地方観音霊場の衰退を見ると、一目瞭然であろう。併せて、日本百観音霊場結願の霊場としての栄誉と、日本三大霊場としての位置を不動のものとしている。

改めて三十四観音とした創始者の知恵の深さ、偉大さを感じざるを得ない。これこそが観音様

の智恵であろうか。

ずいぶんと前置きが長くなってしまったが、より秩父観音霊場を理解していただくためと、ご容赦願いたい。

秩父への道

十月三十一日。巡拝一日目。

秩父三十四観音霊場巡拝に出た。錦秋という言葉がふさわしい頃である。

秩父は埼玉県にあり、東京の都心から北西方に位置していて、険しい山塊に囲まれた盆地。

これほど、遠隔、辺境の地に観音霊場を創設したことには、どのような意味があるのか、今回、秩父霊場を巡拝するに当たり、気になる点であった。

巡拝は二泊三日の予定である。どのガイドブックを見ても、車の巡拝は二泊三日あれば余裕のほずであるが、地図だけが頼りであり、日没の早い晩秋、盆地という地理的条件を考えれば、前半にできるだけ多く廻っておくことが肝要である。

秩父三十四観音霊場は秩父市への入口、荒川右岸の札所から始まり、右岸の山裾の札所を廻り、平地の市街地にある札所へと進む。今度は市街地から奥の山間部の札所へ、クライマックス

は三十、三十一、三十二、三十三、三十四番と荒川左岸の山中に点在する札所を廻り結願する。狭い範囲の中にある秩父観音霊場であるが、この最後の五ヶ寺は、寺間の距離もあり、歩く巡礼者にとっては根性がある場となる。観音様のご慈悲をしみじみ感じる行程でもある。車で廻る者にとっては、秋の陽の中、澄んだ空気の中、美しい風景を眺めながらの行程であった。もったいないことであった。

さて道路の左手に注視して、一番・四萬部寺入口しまぶじの看板を探しているのだが、なかなか出でない。たえず後から大型車が追ってくるので、スピードを落すことができない。道路も狭く車を路肩に止めることも困難であり、本当に走りにくい道である。交差点に四萬部寺入口の看板が見えたが、すでに半分は通過しており左折不可能。やり過ごして先でUターンして、やっと一歩近づいたといった具合で、この先どうなるのか、内心不安が募った。この後も巡拝中はこのパターンの繰返しで、秩父霊場はスムーズに廻れば全行程百十キロ弱であるが、私の車は二百キロ強を走ることとなった。

集落内の野道に入ると、自分に合ったスピードで走ることができ、看板もよく見ることができ。畑の中の道を少し走ると、小さな集落に入る。その一番奥まった所に四萬部寺があった。二メートル程の高さの玉石積みの石垣の上に山門があり、寺というより庄屋といった雰囲気強い。境内に入っても、寺の境内というより庄屋の庭に観音堂が建っているという感じである。この四萬部寺が示すように、秩父霊場の寺々は、寺であることを誇示するでもなく、風景や空気と一体

となつて、自然な形で巡礼を迎えてくれる。気取らない庶民の信仰が、そこには生きていると感じた。本当にあたたかい観音様の慈悲が伝わってくる。何もかも許して受け入れてくれる父母の愛のようでもある。

第一番 誦經山四萬部寺ずきようさんしまんぶじ

埼玉県秩父市栃谷四一八

曹洞宗

本尊・聖観世音菩薩

創建・九八八年

開山・幻通上人

本堂は元禄十年（一六九七）の建立になり、銅葺き入母屋造りの立派なもので、市の文化財に指定されている。秩父霊場では屈指の本堂といえる。

寺伝によると、聖武天皇の時代ぎょうきに行基が秩父を訪ねて、観音像を彫ったといわれている。その観音像が現在の本尊となっていて、寺の創建と深い関りをもっている。

西国三十三観音霊場二十七番札所でもある円えんきやうじ教寺を開基した性空上人は、この観音像のことを知っていて、自らの死を前にして、弟子の幻通げんつうに「自分に代って秩父へ行き、この観音を奉じて教化せよ」と命じた。幻通上人は秩父に下り、四万部の教典を読み、教塚を建てたところから、

四萬部寺が始まった。

一番札所らしく、巡拝用品を売る店もあり、線香、ローソクなどの他、背中に南無観世音菩薩と墨書した白衣を求め、いよいよ秩父観音霊場の巡礼となった。

灯明を点し、線香を焚き、納札、そして経を読むのであるが、いつものことながら、手順がギクシャクする。五、六番札所あたりで、ようやく落ち着いてくる。経は本来ならば観音経なのだろうが、観音経は長くてよく憶えていないため、般若心経と、本尊の観音様の真言を唱えることにした。寺での読経は気持ちのいいものである。時々お経がつかえると、黙って苦笑する観音様の顔が浮かぶようであった。

参拝を終えて境内を出ようとした時、境内の外の雑木林の中にある柿の実が、秋の光の中で鮮やかに輝いているのを見付けた。そこで、

柿の實の鮮やかにして陽の光

と書き留めた。作句の方も出足は快調と自讃してほくそ笑んだ。

近頃では巡拝する人も、巡礼の正装をしている人は少ないが、買ったばかりの白衣の鮮やかさ、ずた袋に付けた持鈴じりれいのチリーンと澄んだ音、そのうえ輪袈裟わげさに金剛杖こんごうづえと、私は何度も巡った四国八十八所霊場仕込みの、巡礼の正装である。やはり、巡礼は正装でなくてはいけない。信仰心に

変わりないと言う者もいるが、正装はより信仰心を高めてくれる。信仰心の薄い者は、正装によって、その心をふるい起こさなければならぬ。形は心をも高めてくれる。

その時、四人連の婦人に声をかけられた。「その鈴の音はきれいなね。どこで売っているの?」これが婦人方の興味の対象であった。話している間に、この婦人たちは群馬から来ていて、これから五番札所まで廻って、温泉に泊って帰るといった。最年少の案内役の婦人が車を運転していて、以前も秩父霊場を廻ったと語った。よかったら五番まで案内しますから、車に付いてくるようにということであった。遅れを取り戻すにはありがたいと、婦人の車を追って二番札所へと出発した。

ところがこの婦人はスピード狂?であった。五十歳過ぎと見受けたが、なかなかの運転技術で早い早い。静かな集落や、野道を、なぜそれほど早く走る必要があるのかと思うほどで、私も懸命に追うのだが、時々見失った。どうやら車に乗ると、人が変わるのかも知れない。道も覚えていないということであったが、二度三度と道を間違えて、集落の人に聞いてやっと着いたという感じであった。

二番・真福寺しんぷくじは、秩父三十三観音霊場が、三十四観音霊場となるために加えられた寺である。山裾から一気に山を駆け登るといった感じであり、秩父霊場の最初の難所である。乗用車が一台通れるほどの玉砂利のゴロゴロする、未舗装の道を一気に登る。杉林を抜けると雑木林になって、視界が拡げた辺りで、階段の上の岩場に建つ観音堂が見えてくる。草を刈っただけの階段下の駐

車場から、急な階段を登り切ると、岩場を削った狭い境内いっぱい、立派な観音堂が木々に囲まれ建っていた。

第二番 おおだなさんしんぶくじ 大柵山真福寺

埼玉県秩父市山田三〇九五

曹洞宗

本尊・聖観世音菩薩

開山・大柵禪師

山の中、木々に囲まれてポツと建つ本堂は、その静かな分だけ時の流れを教えてください。お堂の柱、壁、天井と、隙間なく重ねるように貼られて変色した千社札から、古の人の思いが伝わってくるようであった。

寺伝によれば、真福寺を開山した大柵禪師が岩屋で修行していると、鬼となった老婆が現れ禪師にすがった。禪師は堂を建て供養すると、老婆は帰依のしるしとして竹の杖を遺した。その堂が寺の始まりであり、杖は寺宝としているという。

現在は無住の寺であるが、江戸初期には大寺院であったという。しかし万延元年（一八六〇）の火災で堂宇は焼失し、明治三十七年（一九〇四）になって、現在の堂が再建された。

真福寺の石段を下りていると、秩父市街が一望できる。市街地を包むように、南側に、秩父のシンボルでもある武甲山ぶこうざんを中心に、千二百メートル級の険しい山脈が続き、四方すっぽりと山に囲まれた地形が見て取れる。小ぶりの播鉢すりばちのような、盆地となっている。霊場の寺院が全て見えるわけではないが、この地形に、地図上に示された三十四観音札所を重ねてみると、三十番以降三十四番までの五ヶ寺が、この盆地から外側に外れているが、盆地の中心である市街地を中心に、遠く近く、また疎密に位置して、同心円を描くように札所の寺が点在することが理解できる。どこか太陽系、銀河系を連想させるものがある。当初から感じていた、秩父霊場に対する宇宙感とといったものが具現した思いで驚いた。

今も昔も交通の便が良いとはいえず、耕地が少なく寒村であったこの地に、観音霊場を創設した背景には、何か大きな意図が働いているように思えてならない。

第三十四番

日沢山にったくさんすいせんじ水潜寺

埼玉県秩父郡皆野町下日野沢三五二一

曹洞宗

本尊・千手観世音菩薩

入口からは、かなり急な登り板である。杉林の道の横を小さな沢が流れていて、水音が聞こえてくる。杉林で陽が届かず、全体に湿気の多い道である。山肌に百観音の小さな石仏が並ぶ前を抜けると、あまり広いとはいえない境内に出る。その境内いっぱい六間四面の大きな本堂が、岩壁に背を寄せて建ち、庫裡、百観音結願堂が並ぶ。山懐の小さな平場にあるといった感じが、境内奥には「水潜りの岩屋」があり、かつてここに観音像が祀られていたことから水潜寺の名前があるという。この他、この寺には水にかかわる伝説も多く残されている。

百観音巡礼の結願の寺らしく、どっしりとした重厚さがあり、何より山懐の中、静寂で強い霊気が感じられた。

高床の本堂の内陣に入って参拝。結願の寺であり、無事の結願のお礼もこめて般若心経七巻を

唱えた。「結願香」なる線香も求めた。

納経の折、寺の奥方と思われる婦人が、寺の沿革など、ていねいに教えてくれた。

この寺の創建は古く、天長年間（八二四～三四）の頃で、この地方に大旱魃があった。この時、旅の僧が破風山の西の峠に「澍甘露法雨」と書いた札を立て、ひたすら観音を拝むようにと伝えたといい、これによって雨が降り始め、豊作となった。この時、観音を拝んだ堂が水潜寺になったというのだ。

その後、天文元年（一五三二）に大通院二世敬翁性遵和尚が中興開山として、水潜寺と称したという。

本堂横の結願堂にも参拝した。秩父三十四観音霊場の結願であるが、西国、坂東、そして秩父の百観音巡拝が終った後の参拝であれば、今の気持ちとどう違うだろうか。もっと大きな感動があるのだろうかと思像した。

帰路の下りの参道は、しつかり金剛杖をつきながら、持鈴を響かせて、一步一步ゆっくりと歩いた。

千手とは救いの深き菩薩かな

水潜寺の本尊を思いながら、心静かに一句詠んだ。

ありがたきは、南無観世音菩薩。



地人館 E-books オンデマンド版
紙面のイメージは電子版と異なります。

酒本幸祐 (さかもと こうすけ)

- 1948年 徳島県生まれ。
1969年 大阪府立八尾高校卒。
1970年 東京の小出版社勤務。
1978年 美術誌発刊のため出版社六月書房を設立。
1983年 霊園情報誌『霊園ガイド』を創刊、今日に至る。

以降、霊園ガイドへ掲載のため全国の霊場、社寺の取材参拝を続けている。主に、四国八十八ヶ所霊場、秩父三十四観音霊場、西国三十三観音霊場、坂東三十三観音霊場を巡拝し百観音巡拝を達成。他に鎌倉三十三観音霊場、みちのく三十三観音霊場など、社寺巡拝は多く、近年は修験道に関心を持ち、かつて修験道の盛んだった社寺を中心に取材参拝を続けている。

観音霊場巡拝記 1 秩父三十四札所

著者 さかもとこうすけ
酒本幸祐

初版発行 2021年7月26日

発行 ちじんかん
地人館

〒116-0014 東京都荒川区東日暮里 6-56-6 長戸ビル 3階

Tel 03-6806-7937 Fax03-6806-7939

<http://chijinkan.com/>

印刷・製本 有限会社 朋栄ロジスティック

©2021 Kousuke Sakamoto